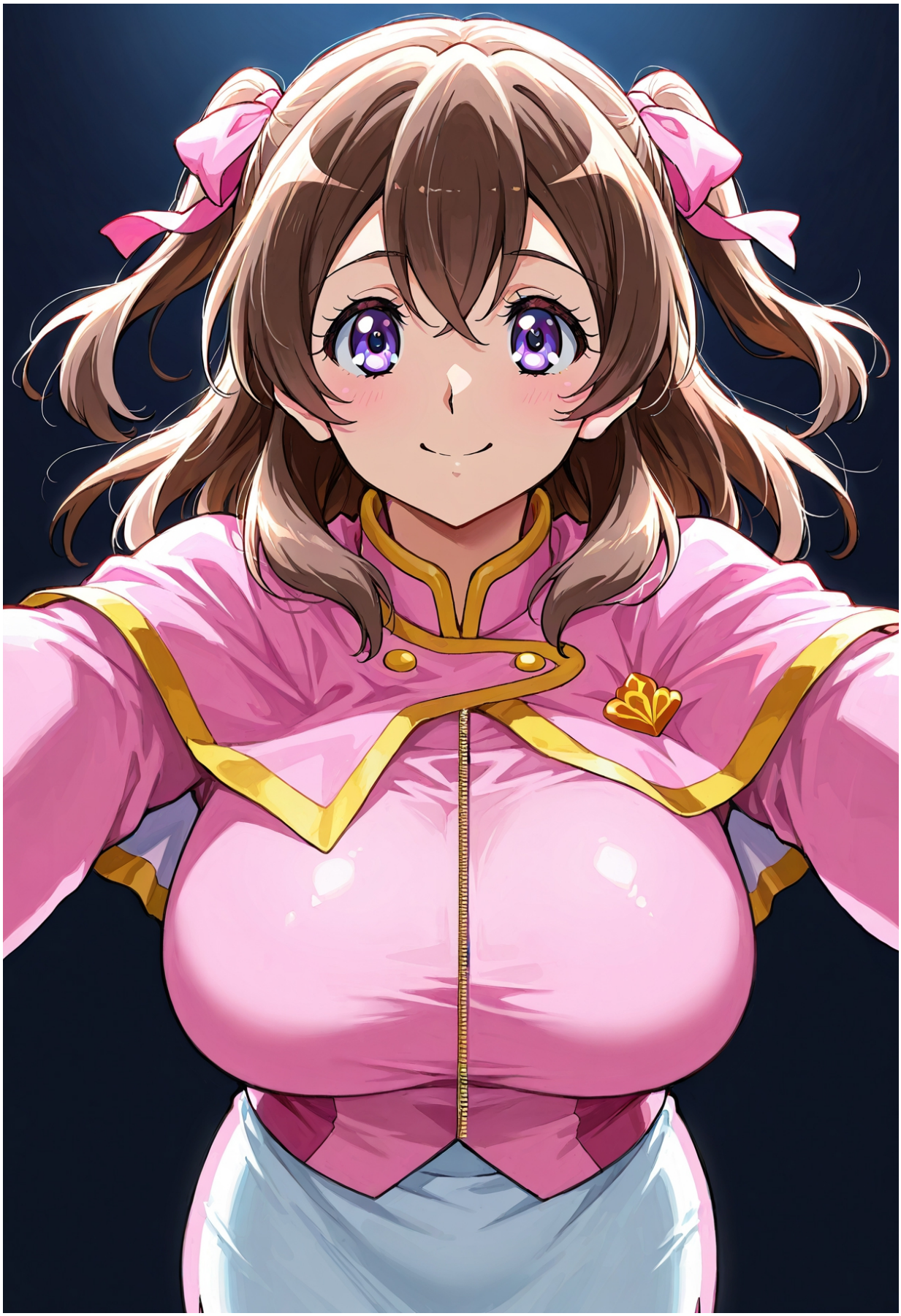
輝石戦隊
キボンヌジャー
戦隊ヒロインは性処理係。
桃園由衣の場合。
プロローグ
戦隊ヒロインピンチ！
丸呑み拘束で
レッドと密着脱出不能編



今、この青き地球は――。
突如として宇宙の深淵から飛来した、ヨドミガルドと名乗る地球外生命体の侵略にさらされていた。人々の営みは脅かされ、都市は炎に包まれ、希望すらも闇に飲み込まれようとしていた。
だが、その最前線に立ち、悪を討たんと輝きを放つ者たちがいる。

それこそが――我らが守護者、輝石戦隊キボンヌジャー！！

ドォォォンッ！！
五色の光が走り抜け、瓦礫の広場に戦士たちが降り立った。

彼らの力の源は、ヨドミガルド襲来よりも以前、天を裂く閃光とともに落下してきた謎の隕石に秘められていた。そこから採取された未知の結晶――のちに“キボンヌストーン”と呼ばれるそれを、人類は叡智によって解析し、やがて超科学の装備“変身戦闘スーツ”を生み出したのである。
その技術を軸に組織は拡大し、輝石戦隊は世界各地に拠点を持つ国際防衛網へと成長していった。

――今回の物語は、その中のひとつ。
日本支部Ｆ市基地に所属する、男性四人・女性一人で編成された戦隊メンバーの物語である。

◇　◇　◇

ドゴォォォォンッ！！
高層ビルの影から躍り出たのは、フロッグール。

　その巨体は三階建てのマンションに匹敵するほどで、跳ねるたびに道路がひしゃげ、車が宙を舞う。

「ゲロロロロローーン！！ゲロォォォ！！」

ズルルルッ……ベチャァァッ！！

　粘液にまみれた舌が地面を這い、アスファルトをジュゥゥゥッと音を立てて溶かしていく。
　すでに住民たちの避難は完了しており、残されたのは破壊された街並みと、戦士たちの眼前に立ちはだかる巨怪のみだった――――。
　フロッグール出現の直後、即座に駆けつけていたキボンヌジャーは、すでに戦闘態勢に入っていた。

「もぉっ！……化け物め、街をメチャクチャにしちゃってぇ！　ゆるさないんだからっ！」

　キボンヌピンクが拳を握りしめ、巨大な怪蛙を睨みつけた。

「三階建てクラスの怪人なんて、そうそういないぞ……！」

　キボンヌブルーが、冷静に敵の規模を分析する。

「でもさ、三階建てクラスって……中途半端じゃね？　キボンヌロボを出すほどの巨体でもねぇし……！」

　キボンヌイエローが、肩をすくめる。

「まぁ、そういう事だろ……俺たち五人の力だけで充分倒せるって事だな！」

　キボンヌグリーンが、仲間たちに檄を飛ばす。

「みんな！　五芒連星の陣形で行くぞ！」

　リーダーであるキボンヌレッドが、鋭く叫ぶ。

　“五芒連星”――五芒星を描くように動き、連続攻撃を繰り出す戦闘パターンだ。

「「「「「おおうッ！！！」」」」」

バシュゥゥゥンッ！！

　五色の光が交差し、戦士たちの姿がフロッグールの巨体へと一斉に立ち向かう！

「いっけぇぇぇぇッ！！」

　レッドの掛け声と共に、キボンヌジャーの陣形が動き出す――。
　気合の入った戦闘開始の声を合図に、五人は瞬時に五方向へと散開。
　フロッグールの周囲をグルグルと駆け抜けながら、五芒連星の陣形を描いていく。

ギュウウウウウンッ！！　バシュゥゥゥンッ！！

　火花と共に、五色の軌跡が夜空へと煌めいた。
　レッド！　→　ブルー！　→　イエロー！　→　グリーン！　→　ピンク！

　順番に対角線上へ飛び込み、攻撃と防御を交互に繰り出しながら、巨大な怪蛙を囲んだ。

「はぁぁぁッ！！」
「これでも食らえッ！！」

　だが――。

「ゲロロロロロロロロッ！！」

　フロッグールは見た目の巨体に反して、驚異的な跳躍力を発揮する。

ドゴォォォンッ！！

　ビルの屋上まで跳び上がると、長大な舌をビュンッと振り回し、五人を薙ぎ払おうとした。

ズルルルルゥゥゥッ！！　バシュゥゥゥンッ！！

「くっ……速いッ！」

「サーベルが届かない……！」

　カエル型怪人としての能力を誇示するかのように、フロッグールは高いジャンプと長い舌で攻撃を繰り返し、キボンヌジャーたちはサーベルをまともに当てられず……。
　結局、五芒星の陣形を描き続けるだけで、頭上を飛び回るフロッグールに翻弄され、苦戦を強いられていた――。

「ゲロロロロローーーンッ！！」

　耳をつんざく咆哮と共に、フロッグールの長舌が弾丸のように一直線に突き出された。

「させるかッ！」

　キボンヌグリーンがサーベルを振り抜き、舌を弾き飛ばす！

ビュンッ！！　ガキィィィンッ！！

　その一瞬の隙を逃さず、背後を取ったのはキボンヌピンクだった。

「タァァァァッ！！」

　華麗な跳躍からサーベルを振り下ろし、勝機を掴んだかに見えた――。
　だが、その時。

ボシュッ！　ボシュッ！　ボシュッ！　ボシュッ！　ボシュシュシュシュシュッ！！

　フロッグールの背中に並んだ無数のイボから、圧縮された液体弾が一斉に噴き出した！

「キャアッ！！」

　思わず身体を縮め、サーベルを構えた腕を前にかざす。
　戦隊マスクの内側で、反射的に目をぎゅっと閉じてしまった。

ブシュシュシュシュシュゥゥゥゥッ！！

　液体の弾丸が雨のように降り注ぐ――。

「「「ピンクッ！！！」」」

　仲間の叫びが響くも、それすらかき消すように轟く着弾音と、鼻を突く刺激臭が辺りを包んだ。

　だが――。
　目を閉じたままのピンクは、痛みを感じることはなかった。
　代わりに全身を包み込むような温もりと、誰かに抱きしめられている安心感があった。

「キボンヌレッド……！」

思わず声が震える――。

「ピンク、怪我はないか？」

ヘルメット越しに必死の声をかけるレッド。

「私は大丈夫よ……！　だけど、あなた……！」

ピンクは、彼の背中へと手を伸ばす。
正面からでは見えなかったが――。
レッドの背中からは、焼け焦げたような煙が立ちのぼっていた。
ピンクは瞬時に悟った。自分の代わりに、彼がその全てを受け止めたのだと。

「レッド……あなた、怪我を……！」

「心配するな。俺は大丈夫だ……！」

レッドは、戦隊マスクの中で――わずかに笑みを浮かべ、強がるように続ける。

「ほんの少し、戦闘スーツを……ただのかすり傷さ」

ピンクは胸の奥がぎゅっと締め付けられるのを感じた――。
その時だった。

「よけろッ！　レッド！　ピンクッ！！」

　対角線上から聞こえるキボンヌブルーの声と共に――。

「ゲロロロロローーーン！！」

　二人のやり取りなど待つ気のないフロッグールは、キボンヌレッドとピンクに自慢の長い舌を伸ばして、攻撃してきた。

ズルルルルルルゥゥゥッ！！　ビュンッ！！

「――っ！」

　それに気づいたピンクは、レッドを抱きかかえるように身体を支え、戦隊スーツのスーパージャンプで跳び上がる！

「タァァァァァッ！！！」

　だが、その舌は先ほどのような直線攻撃ではなかった。
　ねじれ、しなり、まるで生き物の意志を持つかのように大きくうねり――。

ズチュゥゥゥゥッ！！

「キャッ！」
「ぐっ……！」

　その大きな舌にあった無数のイボが、吸盤のようにピンクとレッドのスーツへ

貼りついた！

「ゲロロロロロロロロロローーーン！！」

　勝ち誇るように咆哮するフロッグール！
　そして、次の瞬間――。

カプゥゥゥッ！！

　大口を開けたフロッグールが、その舌を元のあった場所に戻すように――。

「やめろッ！！」

　ブルー、グリーン、イエローの叫びも虚しく……。

ゴクゥゥゥゥ……リ……ッ！！

　ピンクとレッドはそのまま、怪蛙の腹の中へと飲み込まれていった――。

『キボンヌレッド……！！　キボンヌピンク……！！！　』

　ブルーたち、他の戦隊メンバーの声がコダマのように聞こえる中――。

　キボンヌピンクとレッドは、フロッグールの舌からは解放されていたものの、食道と思われるヌメヌメとした狭い場所に、お互いが抱きしめ合った状態で閉じ込められていた。

「くそっ……！　どうやら食べられちまったようだな……。ピンク、大丈夫か？」

　レッドが、息を切らしながらも声をかけた。

「えぇ……私は、とりあえず大丈夫よ。でも……レッド……フロッグールにやられた傷口……本当に平気なの？」

　レッドには――戦隊ヘルメットマスクで分からなかったが、彼女は、心配する表情を浮かべていた。

「あぁ、大丈夫だ。むしろこのヌメっとした液体……意外と傷口に沁みて、逆に気持ち良くもあるさ！」

　レッドは、笑いながら軽く言った。

「え～？　そうなの？」

「はは…冗談だよ…とりあえず、ここは、まだフロッグールの胃袋ではないようだから、胃液なんかで溶かされる心配はないみたいだ」

「うん……そっか……レッド、ありがとね」

　ピンチの最中でありながら、その場の空気を一変させようとするレッドの機転に――。
　頼れるリーダーへの感謝を込めて、ピンクは抱きしめていた身体に、そっと力

を込めた。

「な、なんだよ？　急に……」

　不意を突かれたように、レッドの声がわずかに裏返る。

「さっき、私をかばってくれて……ありがとうって気持ち♪」

　戦隊マスク越しでも伝わる、柔らかな声色。

「な、なに言ってんだよ……仲間なんだから、当たり前だろ……！」

　強がりながらも、レッドは視線を逸らすように言い放った。
　だが――。
　抱き合ったままの姿勢では、キボンヌスーツ越しに伝わる感触までは誤魔化せない。
　ピンクの豊満な胸が、レッドの胸板に押し当てられ……自分の胸板に押し付けられていた事で、動揺を隠しきれないでいた。

ドキン……ドキドキドキドキ……！

　そんなレッドの動揺は、胸の鼓動を高鳴りさせ――それに気づいた彼女の胸にも、お互いの呼吸を合わせるかのように伝染した。

「と、とにかく！　仲間のメンバーがどうにかしてくれるだろうけど……それまでに……自分たちで出来ることを考えないとな！」

　気恥ずかしさを誤魔化すように、レッドは声を張る。

「そ、そうね……！」

　彼女もまた、顔を赤らめて小さく頷いた。
　ピンクは、戦隊マスクを被っていたことで――。レッドに、その表情を悟られることはなかった。
　すると、次の瞬間――。

ピシィィィィィンッ！！

「えっ……！？」

　突如としてピンクの変身が解除され、眩い光が弾ける――。
　キボンヌピンクこと桃園由衣は、戦隊本部支給の制服姿に戻ってしまった。

「な、なんで……！？　こんな時に……！」

　慌てて右手の変身ブレスレットを操作する由衣。

カチッ、カチッ……！

　何度ボタンを押しても、反応はない。

「嘘でしょ……！？　動かない……！」

　動揺する由衣の美貌が、暗がりの中でレッドの視界に鮮やかに浮かぶ。
　吸い込まれるような素顔――それは普段マスクに隠されていた、戦友ではなく一人の女性としての表情だった。

「くっ……こんな怪人の中で、変身できないなんて……！」

　恐怖を隠しきれず、由衣はレッドの胸に縋りつく。

「落ち着け、ピンク……いや、由衣」

　レッドは強い声音で彼女の肩を抱きしめ、真っ直ぐに見つめた。
　すると――。

ピシィィィィィンッ！！

　キボンヌレッドが、由衣の目の前で光を包まれ・・・その輝く光が収まると、そこには、由衣がいつも見ている――キボンヌレッドこと、赤井タクミの姿があった。

「えっ？！　レ、レッドのもっ！？」

　由衣は、レッドの変身も、自分と同じく誤作動で解除されたと思った。

　しかし、そうではなかった。

「いや、自分で解除した」

「はぁ！？どうしてぇ～？そんな事したら、あなたまでっ・・・！！」

　由衣は、驚きと怒りと心配を入り混じらせた。

「こういう状況だ…俺たちは運命共同体！どちらかが助からなかったら、後味悪いだろう？」

　赤井は、揺るがぬ眼差しで答えた。

「でも・・・」

「大丈夫だ！いざって時は、変身して…絶対に、お前を守る！」

　その真っ直ぐな言葉が、由衣の胸を強く打った。
　ヘルメット越しではなく、素顔の瞳で告げられたその言葉に――心臓が、ドキンと跳ねた。

「……っ……」

　見つめ返すことができず、思わず視線を逸らす由衣。
　そのときだった。
　身動きが取れない二人を押し込んでいる壁に――ボコボコとした突起があることに気づいた。
　まるでボルダリング用のホールドのように、手や足をかけられる出っ張り――。

「……あれって……？」

　由衣が、小さく呟いた。
　赤井の肩に身を預け、由衣の腕は自然と彼の腰へ回されたまま――お互いが抱き合うような体勢のまま、由衣は顔を近づけると提案した。

「ねぇ、赤井くん……あの突起をボルダリングの要領で……お互いを持ち上げ合いながら、登っていけるんじゃない？」

「なるほど……協力すれば、突破口になるかもしれないな」

　そう言うと彼は由衣の肩をしっかりと抱き直し、頷いた。

「とにかく、やってみよう。俺とお前なら――できる！」

「……うん！」

　由衣も力強く返事をし、彼の胸に手を押し当てながら体勢を整えた。

ヌチュ……ヌチャァ……ヌルヌル……

　二人は対面したまま抱き合うようにして、粘液に覆われた壁を必死に登っていく。
　この時、赤井は必死に冷静さを保とうとしていた。
　だが――自分の胸に押しつけられる柔らかな感触に、どうしても心臓が落ち着

かない。
　戦隊制服の上からでも分かる、由衣の豊満な胸が規則正しく弾んでいる。
　しかも彼女のスカートの下は、パンティーの上にアンダースコート……。
　互いに大股で抱き合う形で登っているせいで、否応なく意識させられてしまっていた。

「えっ……？」

“ソレ”に気づいた彼女は、小さな声を漏らした。

ヌチュ……ヌチャァ……ギュゥ……

　お互いの腰が粘液で滑り――下腹部が、さらに強く押しつけ合わされる。

「ちょっとぉ～！　こんな時に……何考えてるのよぉ～！」

　思わず由衣は声を荒げてしまった。

「えっ……あ……そ、それは……！」

　赤井は一瞬で、その意味を察し、顔をそむけた。

「い、いやぁ～……す、すまん！　わざとじゃないんだ！」

　誤魔化そうとしながらも、必死に謝罪する赤井。

「も、もう……っ……！　き、気をつけてよね……」

　由衣は顔を真っ赤にしながら、赤井の胸へ額を押しつけた。

「お、おう……！　すまん、気をつける……！」

　赤井も、ぎこちなく返す。
――だが。
　お互いが『気をつける』という言葉を投げかけながらも、それはどうしようもないほど密着したままの状態で――。

（き、気をつけてよねって、何言ってつるの、私……男の生理現象だもの、仕方ないことじゃない…でも、こんな、ずっと、くっつけられてたら……私……）

　由衣は、胸の熱い高鳴りを感じた。

「……とにかく、登らなきゃ……！」

　由衣は小さく息を吐き、自分を誤魔化すように声を出した。

「あ、ああ……」

　赤井もぎこちなく頷き、二人は再び壁をよじ登り始めた。

ヌチュゥゥ……ヌチャッ……ズルリッ……

そのたびに身体が揺れ、胸と胸、下腹部と下腹部が擦れ合う。

密着感は増していき、鼓動は――ますます速くなった。

【体験版おわり】